

乖離した習熟度と意識レベル：

学生のコンピュータリテラシとビジネスマナーおよびセキュリティ

牧 幸浩¹⁾, 平川 幹和子²⁾

1) 九州産業大学 非常勤講師, 2) 九州産業大学 商学部 商学科
ykharmaki@tos.bbiq.jp, hirakawa@ip.kyusan-u.ac.jp

概要：現在の若者の生活には ICT が深く入り込んでおり、一見、学生は ICT を使いこなし、高いコンピュータリテラシを有していると思える。しかし、TPO に合ったメールの書き方やコンピュータ犯罪の対処法に対して意識レベルが低い。本論文では、複数の教育機関での講義を通して明らかになった、学生のコンピュータリテラシ習熟度とビジネスマナーおよびセキュリティの意識レベルの現状を報告し、その原因と情報教育のあり方について述べる。

1 はじめに

スマートフォンなどの携帯情報端末の出現や、SNS などの様々なコミュニケーションツールの発達によって、現在の若者の日常生活には ICT が深く入り込んでいる。この現状から、一見、学生は ICT を使いこなし、高いコンピュータリテラシを持っていると思える。しかしながら、課題提出メールや欠席連絡メールなど TPO に合わせたメールの書き方や、ビジネスに必要なコンピュータリテラシを理解していない上、コンピュータウイルスやネットワーク犯罪に対して漠然とした不安や恐怖を抱いているが実際にはそれに対する対処を知らないなど、ビジネスマナーやコンピュータ犯罪に対して意識レベルが低い。

本論文では、筆者が複数の大学等で担当した講義を通して明らかになった、学生のコンピュータリテラシとビジネスマナーおよびコンピュータ犯罪への防御に関する現状を報告すると共に、その原因と高等教育機関で行うべき情報教育のあり方について述べる。

2 学生のコンピュータリテラシ習熟度とビジネスマナー・セキュリティに対する意識の現状

学生から提出された講義レポートや課題を確認する限り、ワープロソフトや表計算ソフトなどの基本操作はできているものの、文書として体裁をなしていないものが数多く見受けられる。これは情報科目を担当している教員に限らず誰もが抱えている印象である。

例えば、メールで課題を提出する場合、メールの書き方に注意を払わず、本文に課題内容だけを書き込む学生が多く見受けられる。これは学生にとってメールのやり取りが携帯情報端末をメインとした行為であることに起因すると考えられる。個人所有の携帯情報端末でメールやメッセージを送る場合、ほとんどが登録された者同士のコミュニケーションであるため、届いたものが誰から来たのか容易に判断することができる。また、やり取りを行うのは親しい間柄であるからこそ、メールに件名を書かず、本文いきなり用件だけを書くようなことを行う。そしてこの感覚のまま、大学の課題メールを書くのである。

この状況を踏まえ、筆者は複数の大学等で担当した講義の全てでメール提出課題を課した後に必ず正しいメールの書き方(件名・本文の書き方、署名の設定)のレクチャーを行うようにした。そこで初めて、学生はメールを書く時には TPO に合わせた書き方があることを認識し、なぜそのようなことをしなければならないか理解し、正しい書き方を学ぶこととなった。

また、メールの問題のみでなく、何か調査を行ってその内容をまとめるような課題を課した場合、学生はインターネットから素早く情報を見つけ出し、Word 等でレポートとしてまとめようとする。しかし、そのレポート内容は、調べた情報をコピー&ペーストしただけのものであり、自分の言葉で表現しない者が多く見受けられる。さらに、その情報源として Wikipedia から引用する学生が後を絶たない。Wikipedia が誰でも編集可能であり、

その情報に対する信頼性が低いことを学生は知らず、参考文献として Wikipedia のサイトを記すのである。このようにインターネットから収集した情報を精査することなく、盲目的に信じ、何も考えずに再利用する傾向が見受けられる。自ら考えることを放棄したかのような行為は、人に見てもらおうレポートの体裁、タイトル・箇条書き・段落番号などのレイアウト機能の活用を行わないことからも見取れる。

このように、コンピュータリテラシの習熟度については、前述したように情報収集は手慣れているものの、収集した情報に対して、情報の良し悪しを判断する術を知らず、再利用する(自分の言葉で表現する)努力を怠っているように思われる。また、コンピュータやアプリケーションの基本操作については、一通りのことはできるものの、体裁を整えるための機能を十分に使いこなしていない傾向がある。

九州産業大学芸術学部写真映像学科の開講科目である情報伝達実習では、ICT を活用した様々な情報伝達技術(SNS、HP、デジタルサイネージ等)を学び、これらの技術の情報伝播特性(メリット、デメリットを含む)を理解した上で、各自が保有するデジタルコンテンツの情報発信実習を行っている。図 1 に示すように、この講義の受講生(27 名)の多くは、利用頻度は異なるものの複数の SNS、ソーシャルメディアに登録し、利用している。

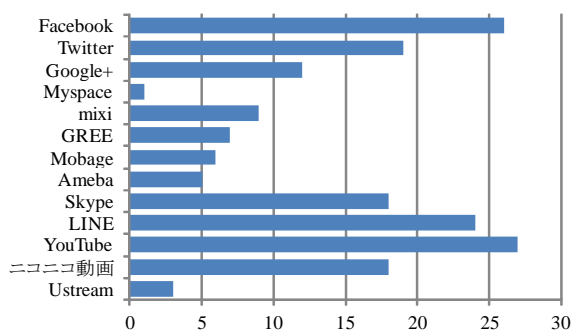


図 1 「情報伝達実習」履修者の SNS、ソーシャルメディア登録数

当該学生はこれらの SNS、ソーシャルメディアを活用し、大学の講義やゼミで作成した動画作品などのアップロード(YouTube 等)、近況報告(Facebook, Twitter 等)、友人、バイト等の連絡(LINE)に活用している。本講義のレポートで「ソーシャルメディアを用いて困った経験」を課したところ、以下の内容が報告された。

- (1) 知られたくない情報まで他人に伝わった。
- (2) 知らない人からメッセージが来て出会い系サイトに誘導されそうになった。
- (3) 一度発言した内容を取り消すことができなかった。
- (4) 友人に勝手に自分の写真をアップされた。
- (5) 友人になりすまされメールアドレスを窃取され、その後スパムメールが届くようになった。
- (6) 架空請求のメッセージが出てきた。
- (7) 知らない人からの誘いについて、相手の素性を判断できない。

(1)、(2)は、多くの SNS のデフォルト設定が公開になっていることに起因するもの、(3)は SNS の仕様によるもの、(4)以降は、悪意ある(あるいは、無知な)人物によるものである。

このように複数の SNS やソーシャルメディアを使いこなしているが、その利用において、嫌な思いをしながらも、これらの利用を止めることなく、そのまま利用し続けている。これは SNS 等のコミュニケーションツールを活用して、友人・知人とコミュニケーションをとらざるを得ない環境に置かれていることも一つの要因であろう。また、これらの危険性を意識しているが、それほど重篤な状況に巻き込まれていないこともあり、セキュリティやネットワーク犯罪に対して、「危ないこともあったが、自分は大丈夫だろう」という思いもあるようである。平川の調査結果¹⁾によると、セキュリティやネットワーク犯罪については、自分にはそれほど関係ないと思っているという結果が出ており、これらに対する意識レベルが低いことを再確認できた。

3 学生のコンピュータリテラシとセキュリティに対する意識調査

3.1 調査目的

前述したコンピュータリテラシ習熟度とビジネスマナー・セキュリティに対する意識レベルの現況を踏まえ、学生が日頃どのような情報端末を利用し、どのように活用しているのか。さらに、コンピュータウイルスやコンピュータ犯罪に対してどのような意識を持っているかを調査することにした。

本調査は、筆者が非常勤講師を担当している福岡女子短期大学、および九州産業大学芸術学部写

真映像学科の1年生を対象に行った。福岡女子短期大学では、4つの学科(食物栄養科、音楽科、文化コミュニケーション学科、保育学科)を対象に、基礎情報科学演習2を履修している学生のうち166名の回答を得た。一方、九州産業大学では、芸術学部写真映像学科で情報処理実習を履修している学生のうち16名の回答を得た。

3.2 調査項目

“情報機器の利用状況等に関する調査”と題して、アンケートを行った。設問は、次の内容で19問用意した。

【設問カテゴリ】

- インターネット検索で利用する情報機器について
- 高校の情報で学んだことについて
- 大学のPCの利用状況と情報科目で学びたいことについて
- 自宅PCの利用状況とそのセキュリティについて
- 携帯情報端末の利用状況とそのセキュリティについて

3.3 調査結果で具体的な設問とその結果を示す。

3.3 結果と考察

アンケートでは、利用している情報機器とその利用状況、およびそのセキュリティ意識を主に聞いた。合わせて情報教育履歴と今後学びたいことも聞いた。各設問と結果および考察を以下に示す。

【設問と回答】

1. あなたがインターネット検索するとき使用する主な機器は何ですか。

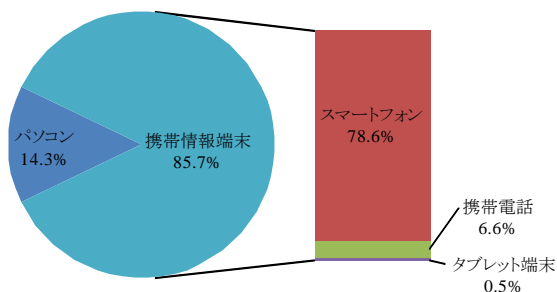


図2: 設問1の回答

この結果から学生がインターネットを検索する際に利用する情報機器は、スマートフォン等の携帯情報端末が85.7%を占め、PCを利用する学生は14.3%にすぎないという回答を得た。これは

携帯情報端末が場所を選ばず即座に起動し、手軽にインターネットにアクセスできるのに対し、PCは利用場所が制限され、さらには起動までに時間がかかることが起因していると考えられる。

2. 高校の情報の授業で使ったパソコンについて教えてください。

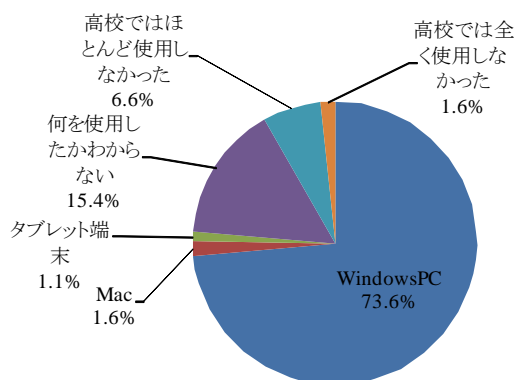


図3: 設問2の回答

3. 高校の情報の授業でどのようなことを学びましたか。

表1: 設問3の回答(複数回答可)

回答	数
ワープロソフト(Word などの使い方)	132
表計算ソフト(Excel などの使い方)	131
コンピュータの仕組み(ハードウェア、ソフトウェア)	102
プレゼンテーションソフト(PowerPoint などの使い方)	90
ネチケット(インターネット利用のルール、マナー)	66
情報通信ネットワークの仕組み	57
情報セキュリティ	56
インターネットを利用した情報検索の方法	52
ビジネス文書の作成方法	45
ホームページ作成ソフトの使い方	35
知的所有権	31
電子メールソフトの使い方	30
データベース	23
プログラミング	22
インターネットを利用した情報検索結果のまとめ方	20
電子メールの書き方(メールを書く際の注意点)	18
その他	14
何も学んでいない	7

設問2と設問3は、高校で情報教育をどのような環境で受けたかを問うものである。ほとんどの学生がWindows環境下で、ワープロ、表計算、プレゼンテーションソフトの使い方を実習で学ぶほか、コンピュータの仕組みやネチケットを座学で学んだことが分かる(以上が上位5傑)。大学入

学初年度にこれら高校時代に学んだはずの内容を再度教育している大学も多い。これは高校在学中に学んだはずのコンピュータリテラシが十分に身に付いていない現状に対応するためである。また、ネチケットも高校時代に学んだと答えているが、メールで課題を提出する場合の、メールの書き方などを鑑みるに、この内容も十分に身に付いているとは言い難い。

4. 大学のパソコンを使って何をしていますか。

表 2 : 設問 4 の回答(複数回答可)

回答	数
学校の課題に関すること	140
インターネットを利用した情報検索・閲覧	73
授業以外はほとんど利用しない	40
動画の視聴 (YouTube、ニコニコ動画など含む)	25
メール、チャット	9
音楽の試聴、ダウンロード	4
ゲーム、オンラインゲーム	3
コミュニティサイト (SNS、ブログ等 例: mixi、Twitter、Facebook、Line ほか) への参加	2
ネットショッピング、ネットオークションの利用	0

5. 大学ではパソコンを使って何が勉強したいですか。

表 3 : 設問 5 の回答(複数回答可)

回答	数
表計算ソフト(Excel など)の使い方	55
ワープロソフト(Word など)の使い方	50
スマートフォンとパソコンの両方でできること	47
プレゼンテーションソフト(PowerPoint など)の使い方	42
YouTube に投稿できるような動画を作りたい	40
ビジネス文書の作成方法	34
ホームページ作成ソフトの使い方	30
情報関係の資格を取得したい	20
プログラミング	19
その他	13
コンピュータの仕組み(ハードウェア、ソフトウェア)	12
ネチケット(インターネット利用のルール、マナー)	10
大学で学びたいことはない	9
情報セキュリティ対策	8
データベース	8
電子メールの書き方(メールを書く際の注意点)	7
インターネットを利用した情報検索の方法	6
インターネットを利用した情報検索結果のまとめ方	6
電子メールソフトの使い方	5
知的所有権	3
情報通信ネットワークの仕組み	2

設問 4、5 は大学の PC 活用状況と大学で学びたいコンピュータリテラシについて問うものである。設問 4 では大学で PC を利用する機会は課題を行うことだけという結果が出た。インターネット検索を行う者もいるが、これは課題を行うと回答した学生がインターネット検索も行うと答えている(73 名中 69 名が該当)。大学にいるにもかかわらず、PC を用いずに携帯情報端末で全てを済ませようとしている傾向があり、PC 離れが顕著に表れているといえる。さらに、大学の PC でメールの活用をほとんどしていないという結果が出ているが、大学の課題提出に利用しているにもかかわらず、このような回答をしていることから、大学のメールを使ってコミュニケーションをとっているという意識がかなり希薄であることがうかがえる。

設問 3 で明らかになった高校時代に学んだ内容の上位 5 傑は、コンピュータの仕組み、ワープロ、表計算、プレゼンテーションソフトの利用法、ネチケットであったが、設問 5 の大学で学びたい内容に、ワープロ、表計算、プレゼンテーションソフトの利用法、動画編集、スマートフォンとパソコンの両方でできることが上位 5 傑に入っている。高校でも学んだはずのワープロ、表計算、プレゼンテーションソフトの利用法を大学でも学びたいということは、自分自身でこれらのソフトウェアの機能を使いこなすスキルが身に付いていないと感じていると思われる。その一方で、電子メールの書き方、ネチケット、知的所有権、情報セキュリティ対策について学びたいと思っている学生は極めて少ない。インターネットを活用する上で気を付けておかねばならないセキュリティ、ビジネスマナーなどに対する意識の低さが改めて浮き彫りになった。注目すべきは「スマートフォンとパソコンの両方でできること」を大学で学びたいことに挙げていることである。インターネットを利用する情報機器は、情報携帯端末がメインであり、PC を利用しない傾向が出ている。しかし、学生自身が、スマートフォンとパソコンの両方でできることに興味を持っているということは、PC も活用したいという意思があるといえる。よって、携帯情報端末と連動した PC 活用法を講義に取り入れ、学生が PC を利用する機会を増やし、社会人になった時に必要なスキルを習得させる ICT 教育を行うことが有効と考えられる。

6. 自宅で平均して一日にどれくらいパソコンを利用していますか？

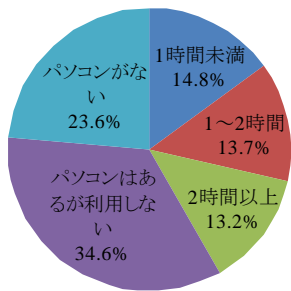


図 4：設問 6 の回答

7. 自宅のパソコンの OS は何ですか。

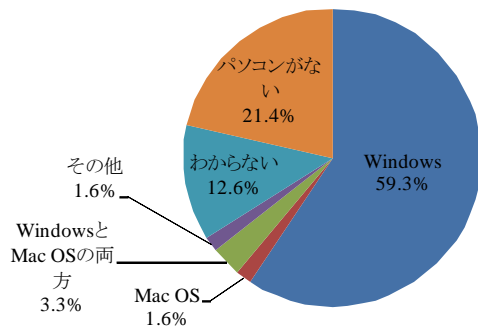


図 5：設問 7 の回答

8. 自宅のパソコンを使って何をしていますか。

表 4：設問 8 の回答(複数回答可)

回答	数
インターネットを利用した情報検索・閲覧	86
動画の視聴 (YouTube、ニコニコ動画など含む)	77
学校の課題に関すること	73
音楽の試聴、ダウンロード	58
パソコンがない	41
ネットショッピング、ネットオークションの利用	31
コミュニティサイト (SNS、ブログ等 例: mixi、Twitter、Facebook、Line ほか) への参加	23
ゲーム、オンラインゲーム	19
メール、チャット	16
パソコンはあるが利用しない	13

設問 6~8 については、自宅での PC 利用の状況を問うものである。自宅 PC の OS は、ほとんどが Windows であり(設問 7)、自宅 PC を利用している学生は 41.8%であった(設問 6)。その活用は大学の PC 同様、学校の課題に関することやインターネット検索である。但し、学校の課題を行いながらインターネット検索をしているのは 86 名中 40 名であった。これは、大学の PC 利用とは異なり、課題作成以外にも情報検索のために自宅 PC を活用していることを示唆している。また、動画

視聴、音楽の試聴による利用頻度が高い。動画視聴については、携帯情報端末のような小さな画面で見るとよりは大画面で見たいという欲求があると思われる。一方、音楽の試聴については、携帯情報端末やオーディオプレーヤーの音楽データを自宅 PC で管理するために使用していると思われる。

9. コンピュータウイルスやコンピュータ犯罪による被害が多数報告されています。あなたはパソコン(自宅、大学、インターネットカフェ等も含む)を使っていて、コンピュータウイルスやコンピュータ犯罪による被害を受けるのではないかという不安はありますか。

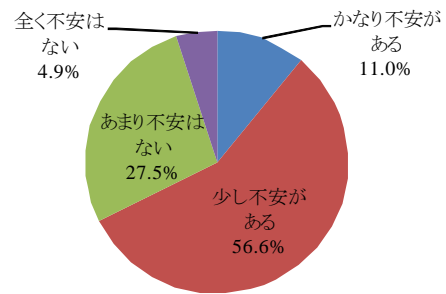


図 6：設問 9 の回答

10. あなたはパソコン(自宅、大学、インターネットカフェ等も含む)でコンピュータウイルスやコンピュータ犯罪による被害を受けたことがありますか。

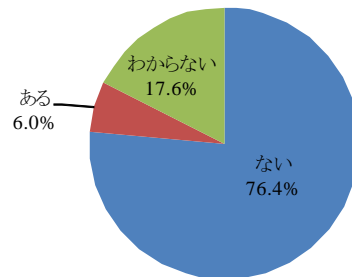


図 7：設問 10 の回答

11. 自宅のパソコンは、ウイルスなどに対するセキュリティ対策をしていますか

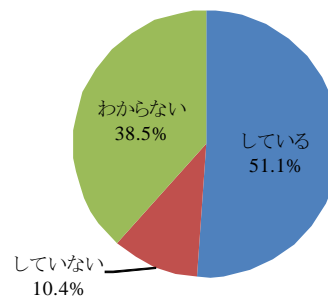


図 8：設問 11 の回答

12. 自宅のパソコンのセキュリティ対策ソフトの種類を回答してください。

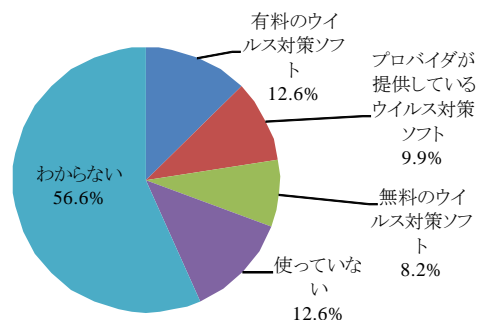


図 9：設問 12 の回答

設問 9～12 については、PC を対象としたセキュリティの意識レベルを問うものである。PC 利用時、コンピュータウイルスやコンピュータ犯罪に多少なりとも不安を抱いている者は 67.6%(123 名)であった(設問 9)。実際に被害を受けた者は 6.0%であり、幸いにも特に多くはなかった(設問 10)。ウイルス対策ソフトの導入などによるセキュリティ対策を行っている学生は 51.1%(66 名)であった(設問 11)。多少なりとも不安を抱いている学生のうち、ウイルス対策ソフトの導入などを行っている学生は、全体の 36.3%(66 名)に留まっている(図 10)。

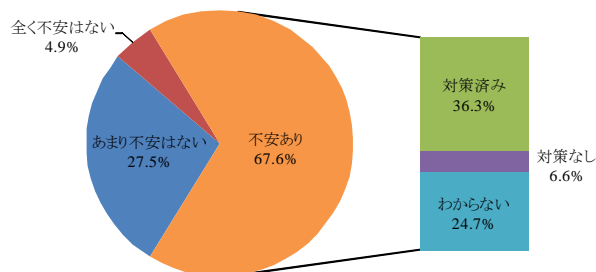


図 10：ウイルス等に不安を抱いており、その対策を行っているかどうか(PC)

その一方で、何らかの不安を抱いているが、具体的に対策を施していない者(対策なし、わからない)が 31.3%いることは、コンピュータウイルスやコンピュータ犯罪に対して、危険性を感じているものの何も対処をしないという意識と行動とのギャップが大きい。これは漠然とした不安や恐怖を抱いていながらも、実際にコンピュータウイルスの感染やコンピュータ犯罪に巻き込まれた経験がないため、その危険性を身近に感じられない、またはその対処法を十分に理解していないものと思われる。また、セキュリティ対策をしている学生のうち 93 名中 45 名(24.7%)が、具体的にどのよう

な対策を施しているか理解しているという結果が得られた。このような学生はセキュリティに対する意識レベルが高いと言えるが、その割合は全体の 24.7%に留まった。

13. あなたが所有している携帯情報端末(スマートフォン、タブレット)について、次の中からあてはまるものを全て選択してください。

表 5：設問 13 の回答(複数回答可)

回答	数
iPhone	101
Android スマートフォン	63
その他のスマートフォン	6
スマートフォン以外の携帯電話	6
iPad などの iOS タブレット(iPad mini, iPod touch を含む)	6
所有していない	4
Android タブレット	2
その他のタブレット	2

14. 平均して一日にどれくらい携帯情報端末(スマートフォン、タブレット)を利用していますか。

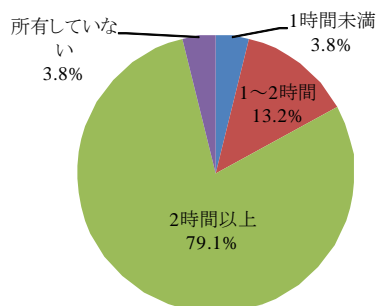


図 11：設問 14 の回答

15. 携帯情報端末(スマートフォン、タブレット)を使って何をしていますか。

表 6：設問 15 の回答(複数回答可)

回答	数
コミュニティサイト(SNS、ブログ等 例:mixi、Twitter、Facebook、Line ほか)への参加	132
インターネットを利用した情報検索・閲覧	123
メール、チャット	104
音楽の試聴、ダウンロード	103
動画の視聴(YouTube、ニコニコ動画など含む)	90
ゲーム、オンラインゲーム	81
ネットショッピング、ネットオークションの利用	56
学校の課題に関すること	36
所有していない	7

設問 13～15 は、個人所有の情報携帯端末の利用状況を問うものである。学生が所有している携

携帯情報端末は 90%以上が iPhone や Android 等のスマートフォンであり(設問 13)、その利用時間は 92.3%が 1 時間以上であり、79.1%が 2 時間以上である(設問 14)。これは自宅 PC の利用時間を大幅に上回るものである。メールやコミュニティサイトへのアクセスは PC ではなく携帯情報端末を主に利用しており、現在の学生は、“連絡を取る手段＝携帯情報端末”という位置付けで考えていると思われる。情報検索、メール・コミュニケーションサイトのアクセスに限らず、ほとんど全てのインターネット上のサービスを携帯情報端末で利用していることがわかる(設問 15)。これは携帯情報端末が PC と同程度の機能を有し、利用場所を選ばず即座に使えるという利便性に起因していると思われる。わずかな空き時間があればすぐに携帯情報端末を起動しインターネットにアクセスすることができるため、その利用頻度は多くなり必然的に利用時間も長くなったためであると思われる。

16. スマートフォンやタブレットでも、コンピュータウイルスやコンピュータ犯罪による被害が多数報告されています。あなたは携帯情報端末(スマートフォン、タブレット)を使っていて、コンピュータウイルスやコンピュータ犯罪による被害を受けるのではないかと不安はありますか。

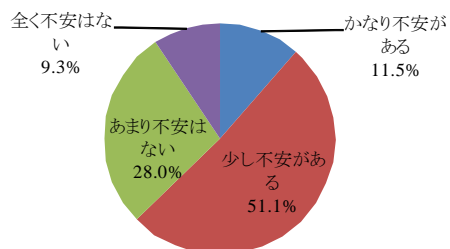


図 12 : 設問 16 の回答

17. あなたは携帯情報端末(スマートフォン、タブレット)でコンピュータウイルスやコンピュータ犯罪による被害を受けたことがありますか。

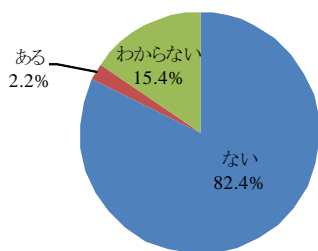


図 13 : 設問 17 の回答

18. 携帯情報端末(スマートフォン、タブレット)にウイルスなどのセキュリティ対策をしていますか。

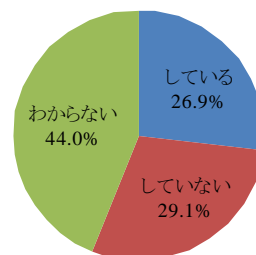


図 14 : 設問 18 の回答

19. 携帯情報端末(スマートフォン、タブレット)のセキュリティ対策ソフトの種類を回答してください。

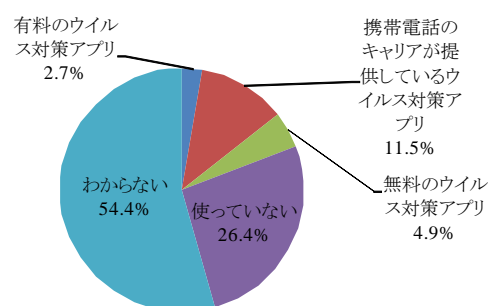


図 15 : 設問 19 の回答

設問 16～19 は、個人所有の情報携帯端末を対象としたセキュリティの意識レベルを問うものである。携帯情報端末の利用において、コンピュータウイルスやコンピュータ犯罪に対して多少なりとも不安を抱いている学生は 62.3%(114 名)であった(設問 16)。実際に被害を受けた者は 2.2%と特に多くはなかった(設問 17)。ウイルス対策ソフトの導入などによるセキュリティ対策を行っている学生は、26.9%(49 名)であった(設問 18)。多少なりとも不安を抱いている学生のうち、ウイルス対策ソフトの導入などを行っている学生は全体の 13.2%(34 名)(図 16)に留まっている。対策をしている学生のうち、49 名中 31 名(17.0%)が、具体的

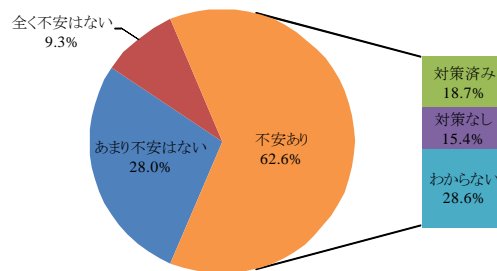


図 16 : ウィルス等に不安を抱いており、その対策を行っているかどうか(携帯情報端末)

にどのような対策を施しているか理解しているという結果が得られた(設問 19)。

これらの結果は、一見、携帯情報端末のセキュリティに対する意識レベルが低いように感じられるが、一概にそのようには言えないと考えられる。なぜならば、携帯情報端末のアプリケーション導入方法が、PC と異なることに起因していると思われるからである。携帯情報端末にアプリケーションを導入する場合、基本的に公式アプリサイトから行う。特に iPhone など iOS を用いている携帯情報端末は、App Store 経由でなければアプリケーションを導入することはできない。iOS 用アプリケーションは、App Store に掲載される前に厳しい審査を受け合格しなければ掲載されることはない。そのような状況ではウイルスが紛れ込む余地は少ないと考えられている。また、Android 携帯端末のように開発メーカーが多数あるわけでない Apple 社のみ iOS 携帯情報端末にはウイルスが出回りにくく、アンチウイルスソフトは現在のところ存在しない。設問 13 で iOS の携帯情報端末の所有者が全体の 57.1% を占めていることから、Android 携帯端末や WindowsPC に比べて、コンピュータウイルスに対する危機感が低いような結果が出たと思われる。

4 まとめ

今回、2 大学の 1 年生を対象に情報機器の利用状況とセキュリティに関するアンケートを実施したが、情報機器の利用状況、およびセキュリティに対する意識レベルは教育機関ごとによる大きな違いは見られなかった。また、インターネットの活用に関しては、携帯情報端末の利用が主であることが明らかになった。さらに、PC、携帯情報端末利用時にコンピュータウイルスやコンピュータ犯罪に不安はあるものの、対策を施している学生はそれほど多くなかった。

筆者のような非常勤講師の立場で、様々な教育機関の情報科目の講義を担当する際、最も気になるのが、学生のコンピュータリテラシ習熟度である。学生の習熟度レベルに応じて講義内容を変更しなければならないこともあり、最初の講義で、「受講科目に対する意気込み」と題するメールの課題を課しているが、これはメールの書き方をどの程度理解しているかを確認するためでもある。メールの書き方を学ぶことで、学生は TPO に合わ

せた ICT の使い方を知り、他者への気配りの大切さを認識する。そのため、筆者は講義で、様々な場面でのメールの書き方をレクチャーし、これに沿わないメールを出す学生は添削し、合格するまで何度でも再提出させるようにしている。最終講義では、受講科目に対する感想をメールで送ってもらっているが、「メールの書き方を指導してもらってよかった」というコメントを数多くもらっている。また、セキュリティについても、極力コンピュータ犯罪や著作権等について、事例を挙げて身近な問題であることを意識させるような講義内容にするよう心がけている。また、情報処理機構 (IPA) やウイルス対策ソフトの Web サイトでセキュリティ情報とその対策について日頃からフォローしておくことは必須であろう。また、情報処理機構で公開されている情報セキュリティの「対策のしおり」⁴⁾などを情報教育に活用すべきである。

ビジネスマナーやセキュリティについては、情報の基礎教養科目の中で、コンピュータリテラシと同時に、ビジネスマナーやセキュリティに関する事例を、できれば学生自身が経験したことを題材として提示し、どのような状況に陥るのか、巻き込まれた時の対処方法などを提示し理解させることで、学生の学ぶ意欲を引き出しながらセキュリティを意識してインターネットを積極的に使うよう指導すべきである。さらに、課題やレポートについても、ビジネスマナーやセキュリティを意識させるような内容を課し、提出された内容について、体裁も含め添削し、合格基準に達するまで何度でも再提出させて、社会に出た時に必要なスキルを身につけさせるようにすべきであろう。また、今回の調査で明らかになった学生が興味を示した「スマートフォンとパソコンの両方でできること」を考慮し、携帯情報端末と連動した PC 活用法を講義に取り入れ、様々な情報機器に対するコンピュータリテラシ教育を行うことが良いと思われる。

来年度以降の担当科目に今回の提案を取り込んだ講義を行い、学生の反応を見てみたい。

参考文献

- [1] 平川幹和子, 「インターネットビジネスへ向けた初年度 ICT 教育のあり方」, 大学 ICT 推進協議会 2013 年度年次大会論文集, (2013)
- [2] 情報処理機構 > 情報セキュリティ > 対策のしおり, <http://www.ipa.go.jp/security/antivirus/shiori.html>